

# ミュージカル「エリザベート」の楽曲分析

## Musical Analysis of the Musical “Elisabeth”

1W173012-3 稲澤 凜 指導教員 菅野 由弘 教授

INASAWA Rin

Prof. KANNO Yoshihiro

概要：本研究では、ミュージカル「エリザベート」の楽曲分析を行い、楽曲が持つ機能と、音楽的効果が演出に及ぼす影響を考察した。まず「エリザベート」の楽曲から、リプライズ部分のフレーズをリストアップする。そして、それぞれをフレーズごとに対比することで、楽曲に込められた演出意図を探る。その結果、リプライズという音楽的効果によって、「自由の追求」という作品全体を通したテーマが楽曲に強く印象付けられていることが読み取れた。

キーワード：ミュージカル、エリザベート、ミハエル・クンツェ、シルヴェスター・リーヴァイ、楽曲分析

Keywords: musical, Elisabeth, Michael Kunze, Sylvester Levay, Musical Analysis

### 1. はじめに

ミュージカルは歌、踊り、芝居が融合した演劇形式であり、作品それぞれに多くのミュージカル・ナンバーが登場する。それらは独立して存在するのではなく、作品全体を通して物語の展開や登場人物の心情の表現などの重要な役割を担っている。そこで、ひとつのミュージカル作品を構成する楽曲に重点を置き、楽曲が持つ機能と、音楽的効果が演出に及ぼす影響を考察していきたいと考えた。本研究では、ミュージカル「エリザベート」を題材とする。

### 2. ミュージカル「エリザベート」

ミハエル・クンツェが作詞・脚本、シルヴェスター・リーヴァイが作曲、ハリー・クプファーが演出を担当。ハプスブルク帝国崩壊の史実をベースとして、黄泉の帝王トート(死)という抽象的な存在を加え、帝国最後の皇后エリザベートの生涯を描いたミュージカル作品である。

1992年にアン・デア・ウィーン劇場で初演し、6年続くほどの大ヒットを収めた。その後、日本、ハンガリー、スウェーデン、オランダ、イタリアなど世界各地での上演や、ウィーンでの再演も行われた。日本では1996年の宝塚歌劇団による初演に続き、2000年に東宝版が上演され、現在でも再演が繰り返されている。

この作品はどの上演においても一様ではなく、プロダクションごとに演出や楽曲、構成さ

れるシーンに変更が加えられており、初演から長い時間が経過した現在でも進化し続けている。

### 3. リプライズ部分考察

ミュージカル「エリザベート」の楽曲から、リプライズ部分のフレーズを抜粋し、対比することで演出意図を考察する。

#### 【愛と死のテーマ】

この作品で最も特徴的な要素といえるのが、「死」を具現化したトートという存在である。黄泉の帝王であるトートは、木から落ちて生死をさまよったエリザベートに初めて「愛」という感情を抱く。そして彼女の愛を求めて、人生に深く介入していく。その「愛」を象徴する楽曲が【愛のテーマ】である。この楽曲は、リプライズの度に歌う人物や心情によって調性が変化しているが、トートとエリザベートの出会いからエピローグまで、一貫して同じフレーズが繰り返されており、トートとフランツからエリザベートへ向けた不変の愛が表現されている。一方「死」を象徴する楽曲は、モチーフを共通としながら、様々なフレーズに展開してリプライズされる。これは、トートがエリザベートからの愛を求めるあまり、彼女自身だけでなく、彼女に近い人々やハプスブルク帝国の運命までも死の支配が及んでいることを示している。

### 【主人公に対する鏡の存在】

皇太子ルドルフは、エリザベートの人物像を映し出す鏡となる役割を果たしている。ルドルフとエリザベートは、宮廷という縛られた空間を窮屈に感じており、自由を求めているという点で共通している。またルドルフは、自由を求めた結果としてハンガリー国民の信頼を得た母の姿に憧れ、執拗にその背中を追いかけていた。母と息子という関係であるエリザベートとルドルフが同じフレーズを歌うことによって、2人が似た素質を持つ存在であり、お互いに意識していることが読み取れる。しかしエリザベートは、皇后と皇太子という関係から逃れられない現実の世界では、それを認めることができなかった。その齟齬が、エリザベートが民衆から受けた讃美がルドルフの願望に終わったことや、ルドルフが求めた母の言葉を得たのは彼がこの世界から去った後であったことに表現されている。

### 【個人と社会の衝突】

この作品では、自由を求める個人と社会の衝突がテーマとして描かれている。特にエリザベートを含む主な登場人物がおかれている皇室という場所では、この衝突が顕著に表れ、彼らに齟齬が生じていく。この衝突のひとつが、しきりに縛られない自由な生き方を求めるエリザベートと、皇帝という社会における立場を守るフランツの夫婦関係である。結婚前の2人が歌う【あなたが側にいれば】という楽曲は、晩年に【夜のポート】としてリプライズされる。2つの楽曲には共通したフレーズが使用されているが、歌割りや調性を変化させることで、2人の望む生き方が長い時を経てすれ違ってしまったことが表現されている。

### 【登場人物の象徴】【場面の象徴】

ミュージカル作品では、人物毎にそのキャラクターを象徴した楽曲を提示し、登場場面でリプライズすることで、人物の造形を深める手法が多く取り入れられる。同様に、場面を象徴した楽曲のリプライズによって、観客の理解を補う効果も期待される。ミュージカル「エリザベート」は脚色を加えながらも実在した人物の長い人生を描く作品である。それぞれの場面はあくまでも断片的に描かれたものであり、場面毎に様々な役柄の人

物が舞台上に登場する。そのため、この作品においてもそれぞれの登場人物や場面のテーマとなるフレーズが象徴的に使用されている。

## 4. 結論（まとめ）

本稿では、ミュージカル「エリザベート」を構成する楽曲を、リプライズという音楽的效果に注目して分析することで、楽曲に込められた演出意図を考察してきた。その中でも、この作品に強く印象付けられているテーマは、自由の追求である。彼女の生き方を象徴する楽曲をリプライズすることにより、彼女が自分の置かれた環境に左右されず、最後まで自分を見失わずに自由を追求し続けたことが表現されている。また、リプライズとしてそれぞれのフレーズは共通しているものの、調性や歌割りが異なっており、繰り返される度に異なった印象を受ける楽曲も多い。このことから、物語を通して自由の追求という彼女の根本の生き方は変化していないが、その人生を構成する上で彼女が本当に必要としている要素は、成長とともに変化していることが読み取れる。

また、その自由を追求し続けた姿勢こそがエリザベートの魅力であり、物語の中でも多くの人物が彼女に惹かれた理由である。この作品で描かれている時代は君主制が終わりを迎える頃であり、エリザベートはハプスブルク帝国という滅びゆく運命の真ただ中に生きていた人物である。周りの人々はその運命に翻弄される中、彼女だけはその世界を冷静に見つめていた。このように、皇室という束縛された環境において、個人の自由を求めて闘い続けたエリザベートの生き方は非常に今日的である。彼女の魅力が物語の登場人物だけでなく、観客にも共感を得ていることが、この作品が現代において人気を博している理由のひとつである。

注：

\*1 岩崎徹，渡辺諒「世界のミュージカル・日本のミュージカル」横浜市立大学学術研究会，2017

\*2 「エリザベート 2016年版キャスト DVD Black ver」(東宝株式会社)

\*3 Michael Kunze & Sylvester Levay, Klavierauszug "Elizabeth" Edition Butterfly Roswitha Kunze D-22391 Hamburg Neuauflage 2018, Sisi Music